

一 次のⅠ・Ⅱの文章は、いずれも日高敏隆の『世界を、こんなふうに見てごらん』の一節である。これらを読んで、後の設問に答えよ。

I

二〇〇八年の夏、中央アメリカのコスタリカ共和国を訪れた。

国の広さは日本の九州と四国を合わせたほどだが、中央に活発な火山帯があり、さらにカリブ海と太平洋というふたつの海からの影響を受けて、多様な気候と生態系を有している。

コスタリカには地球上の動植物の約五パーセントが集中しているといわれ、一九七〇年代以降、森をよみがえらせるために世界でも先進的な環境保護政策がとられている。

国土の四分の一は国立公園¹や自然保護区であり、めずらしい虫や鳥、動物との出会いを求めて各国から人々がエコツアーニに訪れる。

ぼくは東南アジアとアフリカには行ったことがあるけれども、新熱帯（※コスタリカを含む中南米の生物地理区を新熱帯区²）²という。生物地理区とは生物の分布によつて八つに大別される地球上の地理区分には行つたことがなかつたので、そこの熱帯雨林とはどういうものか、一度、自分の目で見てみたいと思つていた。

昔から熱帯雨林には単純なあこがれがあつた。ターザンではないが、いろいろな本で読んで、へえ、すごいなあ、行つてみたいなどずつと思つていた。

最初にアフリカに行く機会に恵まれたが、アフリカ大陸全体は非常に乾燥した土地で、思つたほど暑いところではなく、ぼくの訪れた範囲では熱帯雨林らしきものを見かけなかつた。

その後、東南アジアに行き、そこには確かに熱帯雨林といえるところがたくさんあつた。とにかく湿つていて、木がたくさんあり、さまざまな植物と動物で満ちている。本物の熱帯雨林はそれまで本を読んで勝手につくつたイメージとだいぶ違つていて、非常に感激だつた。

しかしコスタリカに行つてみると、新大陸の森林は、正直いつずいぶん違うなあと思った。もちろんアジア、アフリカのそれとは違うと知っていたけれども。

ぼくが感じた根本的な違いは、これはいわゆる森林という格好のものではないということだ。

どこが違うかといわれると困るが、一回、人間がかなり優位になつたことのある場所という印象だつた。

アジアでもアフリカでも、人間が一度自然に手を入れてしまふと完全にはもとに戻らないという例を見てきた。たとえばアフリカに行つたときは、かつての熱帯雨林の話を聞いているからすぐ期待して行くが、実際にそこで見る森はなんだか情けない感じなのだ。

人間が手を入れると、その前の自然には一度と戻らないのではないかという気がする。

人間の介入というのはそれほど大きな影響をおよぼすのだ。コスタリカではそのことがいちばん印象に残つた。

別のいい方をすれば、そこで見たものは人間というものの自覚のなさをよく表していると思つた。

自然はすばらしい。普通、みなそういう印象を持つている。

しかしほくは、人間はここまで破壊的なのかという印象を持つ。

むろん地球上にはまだ人間が足を踏み入れたことのない森が残つているだろう。が、たいていのところにはもう人間が入つてしまつてゐる。入らなくても大気汚染や温暖化はしのびよう。

仮に自分たちは自然を壊さない、伝統的なやり方で森に入つてゐるという者がいても、刃物などを持つなら、もうそのダメージはもとに戻らないほど深いと考えるほうが適切ではないか。

自然はすごいというより、人間がすさまじいと思う。これから我々人間はそういう自覚を持つほうがいいのではないか。

子どものころお話を聞いたような熱帯の自然はもうほとんどないかもしないと認識することは、ぼくにとつて非常に大事なことで、残念もあり、悲しいことでもあつた。

ほんとうの自然の森には道もなければ知識も、地理も、名前も、何もないはずだ。そのような自然のままの自然、自然のま

の大森林はもはやほとんどない。どこか奥地に行くとあるのではないかと思つてゐる人は多いと思うが、そうではないと知る必要があるだろう。

ぼくらはもはやそんな時代にはいないのだ。

熱帯の自然に対するイメージは変わり、これからは、残された自然からもとはどうだつたのかを想像するくらいしかできないのではないか。

総合地球環境学研究所のときもよくアドバイスをしたのは、環境を研究するとき、そこには必ず人間が関わることになる、どこまで手をつけたかを意識したうえで自然を見なくてはいけないということだ。

ああ、これは手つかずの自然だなんて、うつかり思つてはいけない。人間が入つたらもはやそこは自然ではないのだから、人間が入つていないように考えてはいけない。それを重々認識したほうがいいという話をたびたびした。

それは物理学における観察者と観察される粒子の話とよく似ている。

粒子は観察されたとたん、それまでとふるまいが変わる。人間の関わり自体が、関わる現象を変化させる。

B 人間といふものは、大きな自然に対しても、極小の自然に対しても、結局同じ問題を抱えざるをえないのかもしれない。

それと違つて人間以外の動物は、自分がつかまえて食う動物に対する影響はあるだろうが、それ以外の動物や環境に対する影響はあまりない。少なくとも動物は環境を変えようとは思つてはいる。

その違いが人間の持つ重要な意味ではないだろうか。

ほかの動物が生きているということを、いちいち考へてゐる動物はない。ところが人間は考へる。

動物も生きていて、人間も生きていて、なんて考へはじめたら、それ自体もうすでに素直なことではなく、
になつてゐる。

動物と同じ、人間は自然の前に無力だといいながら強烈なことをやつてゐるということを、人間自身もうそろそろ認識したほうがいい。



自然は壊れないと氣楽に思っているかもしだいが、そんな甘いものではないということを意識してみることだ。それは人間が持っている自然観を根本的にひっくり返すような世界の見方かもしだいが。

西洋の書物を見ても、「ほんとうの自然」³という言葉が簡単に出てくる。

人間は自然を征服するものだと思つてゐる西洋の人間でさえ、壊れないところに本物の自然があると思つてゐる。それはお話、イリュージョンとしては成り立つかもしれないが、やつぱり気をつけていないと危ないなとぼくは感じる。

人間がいかに破壊的かという見方に立てば、簡単に「自然を守りましょう」なんていえなくなる。

原始の人間は自然の中で自然に暮らしていたといわれるが、ほんとうにそうなのか。何らかの手はつけていたのではないだろうか。

さらに近代の人間は他とは異なる存在としての人間観というものを確立した。人間は人間である、と。

その意識がある以上、人間は人間以外のものと本来的に対立している。それを忘れるときわめていいかげんなことになるのではないか。

月、火星、木星の衛星エウロパと、これらの時代、人間が利用し、関わりを持とうとする環境は地球だけではなくなるだろう。

そこに行く、食う、住むなど、人間が何かしようと思えば、とたんに人間の影響がダーツとなだれ込む。

どこかの環境に手をつけない形で人間が入るなど、もし、できるといわれてもほんとうかと疑つたほうがよい。

人間は自然を破壊するものだ。

そうはつきり認識しておくほうが、よっぽど自然を守ることにつながる。守つてゐるといいながら破壊している人間がたくさんいるのだから。

コスタリカには、一九九七年に京都賞を受賞したペンシルバニア大学のD・ジヤンセン博士がいて、ぼくは委員会のメンバーとして彼への授賞に関わったことがある。

彼は熱帯とそこに棲むいきものの消失を食い止めるには、人間がそのすべてを「庭」として管理することが必要だと主張している。

庭の外の手つかずの自然を認めて放置するか、それともすべての自然にあえて手をつけ、人間の庭とするか。
よいと思うかどうかは別にして、人間という動物は、やはりどうも全部を庭にしていく方向しかない動物なのではないかとう気がしている。

コスタリカで少し昆虫採集をした。

科学者が調査目的で国の許可を得ている場合以外、コスタリカでは一般人が虫を捕ることは禁止されている。子どもが虫捕り網を振るう姿も見られない。

しかし要是数の問題だろう。どれだけの数のどういう種類のいきものがいるというバランスのうえに自然が成り立っているのであって、それがくずれない見通しが立つならば、本来、子どもが二匹や三匹虫を捕つてもいいはずだ。

ただし、無邪氣な子どもも何千人いればまた別だ。子どもが捕る一個体が全体に対してもういう影響を持つか、見通せることが大事だと考える。

子どものころ、ぼくはチョウを捕ることが好きだった。それは捕つて見ることがチョウをちゃんとわかることだったからだ。飛んでいるときには見えなかつた細部がわかつたり、本で調べたりすることができた。

だから一匹か二匹捕つたらそれでよかつた。

どんな虫かがわかるというのは決して悪いことではない。それも禁止したら人間は自然と付き合えなくなる。

コスタリカの子どもたちがチョウを捕つてはならず、飛んでいる姿しか見られないという状態は、子どもたちがほんとうにいきものをわかることにつながらないだろうと思う。人間には イ があり、それはとても大事なことなのに、いきものをつかまえてはいけないとなると、自然とうまく付き合えない大人に成長するかもしれない。

自然と知りあうことで学んでいくのが人間だ。

その素朴な感覚は大事だと思う。

D 昆虫採集にキヤツチアンドリリースは、あえて必要ないと思っている。むしろつかまえたら殺して、標本にして、よく見ることをおすすめする。こんな虫かと。

それがよくわかれればそれでいい。

数を集めることは必要ないし、おすすめしない。

コレクターではなく、「見て知る」者になつてほしい。

それが、人間という、無邪気ながらも恐ろしい破壊者になつていく道から抜け出す回路のひとつかもしれないと思う。

II

自然現象は幅広い。

人間が調べたひとつやふたつの要素でできあがつてはいるのではないということをちゃんと認識することがいちばん重要で、おげさにいえば、それは我々が自然はどういうものかを基本的にどのように認識するかということに関係してくるだろう。

人間には自然を破壊することはできてもコントロールすることはできない。ぼくはそう思つていて。

ある時代から人間は、科学の力で自然を制御できると思いはじめ、今もそう信じているが、それは根本的な間違いだ。

自然には人間がわかつてはいる以上のたくさんの変数があり、自然をいじつてダメにする^{あやつ}ことはできるけれども操ることはできない。

ちょうど、何も知らない素人が、電車を止めることはできても、電車全体を運行させることはできないように。

自然を動かしているシステムはもつと複雑だ。

だからこそ環境や生態といった自然を対象とする研究は、具体例から進めていくのがいいと考える。人間にはそれしかできな
いはずなのだ。

もちろん、原子力や遺伝子の操作のように、人間は自然現象の一部分を止めたり進めたりはできるようになったかも知れない。ほかの動物にくらべれば、少しできるようになつたのだろう。

しかし全部は無理だ。それでいばつてしまつたらおしまいだ。

その意味で、地球温暖化もそう簡単に止められないだろうと思う。化石燃料が大気のバランスを壊す一因になつたとは思うが、気候変動そのものは、地球上に人類が生まれる前から起⁵こつていて複雑な自然現象だ。

科学のおかげで人間はいろいろなことをできるようになつたが、それで自然全体をコントロールできると思うのは非常に危険だという気がする。

いきものの生態を観察するために、アクアリウムや飼育箱⁵のような限られた実験空間が必要なことがある。

ぼくはもともとそういうやつていきものやその環境をコントロールすること自体にあまり興味がない。しかしそういうことが好きな人もいて、困ったことに、そのほうが科学的だと思われている。

科学とはすなわちコントロールすること、そして人間は科学ができる、ほかの動物はできない。

限られた箱の世界をのぞき込むうちに、そういう認識を育ててしまいやすいことには気をつけなくてはならないだろう。

ただぼく自身、チョウのさなぎの色が変わる原因を調べたり、ハチの生育条件を探つたりするのに、飼育箱はおおいに利用した。

自然をコントロールしている变数を知ることに興味がないのではなく、自然の中でどうしてこういうことが起こっているのかを知りたいのだ。

わかるとそれはうれしい。でも、だからといって自然を変えていけるとは思わない。そんなふうに考えたこともない。

いつたい何が原因なのか、ということを知りたいだけだ。

(日高敏隆『世界を、こんなふうに見てごらん』)

設問

(一) 空欄 ア・イに入る語句として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

1 自然保護思想

2 博愛思想

3 沢神論

4 動物愛護主義

5 人間中心主義

1 本來的な執着心

2 知的な好奇心

3 素朴な捕獲欲

4 本能的な征服欲

5 旺盛な収集欲

(二) 傍線 Aについて、筆者は、アフリカやアジアの森林と、新大陸の森林とを比較して、どのような点が「ずいぶん違う」と思ったのか。適當なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 アジアやアフリカの森林は、かつての熱帯雨林らしい感じがしなかつたが、新大陸では期待していた熱帯雨林のように感じられた点。

2 アジアやアフリカの森林は、木をはじめさまざまな植物と動物で満ちていたが、新大陸ではあまり動植物が豊富には見られなかつた点。

3 アジアやアフリカの森林も、一回、人間が優位になつたことのある場所という印象がするが、新大陸では自然がより優位に立つていた点。

4 アジアやアフリカの森林は、本などで読んできたイメージどおりの熱帯雨林であるが、新大陸ではいわゆる熱帯雨林と呼べるところがなかつた点。

5 アジアやアフリカの森林も、人間の手が入ると一度と元には戻らないが、新大陸では人間の介入の度合いがより大きく感じられた点。

(三) 傍線——Bについて、人間が「極小の自然」に関わる際に抱える「問題」とは、どのようなことか。具体的な説明として適當なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 どんなに小さな自然でも、かつての熱帯と同様に、すでにイメージが変化してしまつていて、想像しかできないこと。
- 2 物理学における観察者は、観察される粒子があまりに小さいものであるために、どこまで手をつけたか意識できないこと。
- 3 人間の関わり自体もまた、大きな視点から見れば、小さな自然現象であることからのがれられないこと。
- 4 小さな粒子を観察すると、観察者の関わりによつて対象に変化が生じ、本来の状態を観察できないこと。
- 5 人間は、自分がつかまえて食うような小さな動物からも、常に影響を受けるということ。

(四) 傍線——Cについて、ここにいう「庭」と同様の意味を持つものとして、適當なものを、本文中の傍線——の語のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 自然保護区
- 2 热帶雨林
- 3 「ほんとうの自然」
- 4 標本
- 5 飼育箱

(五) 傍線——Dについて、筆者は「昆虫採集」のことをどのように考えているか。適當なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 チョウなど、子どもが捕る一個体の全体に対する影響は、自然のバランスを崩すほどにはならないと考えている。
- 2 昆虫採集においては、虫が生きていることが大切なのではなく、虫を捕つて殺してでも、じっくりと観察することが大切だと考えている。

3 昆虫採集の際には、キャッチアンドリリースをすると、かえつて自然に悪影響を及ぼすかもしれないのに、殺す方がよいと考えている。

4 昆虫を必要以上に数多く採集すると、標本の数が増えすぎるので、かえつて自然をしつかりと観察することができなくなると考えている。

5 人間が無邪気ながらも恐ろしい破壊者にならないために、昆虫採集は不要であると考えている。

(六) 本文において筆者は、「人間」と「自然」との関係について、どのように考えているか。適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 人間は伝統的なやり方を用いる限り、手つかずの自然を残すことができる。
 - 2 自然を保護することには、人間が自然とうまく付き合えなくなる危険性が伴う。
 - 3 人間の介入の恐ろしさを自覚することにより、人間は地球温暖化などの自然現象を止めることができる。
 - 4 自然現象を観察するためには、人間が環境をコントロールする必要がある。
 - 5 人間は、自然と飼育箱のような限られた実験空間とを混同してはいけない。
- (七) 筆者は、本文Ⅰ・Ⅱを通じて、「科学」とはどのようなものであるべきだと正在するか、説明せよ（句読点とも四十字以内）。

(以上・九十点)

二 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

姫君は帝の后にと大切に養育されていたが、父大納言が亡くなり、母君とともに荒れ果てた屋敷に住んでいた。一方、兵部卿宮の息子である中将（宮の三位の中将）は、左大臣の娘と結婚したが愛情を持てず、憂鬱な日々を送っていた。ある夜、中将は姫君を垣間見て、ともに一夜を過ごした。翌朝、後朝の和歌を送るが返事はなく、中将は再び姫君の屋敷を訪れる。

中将は心もとなく、暮るるも待ちわびて、いつしかおはしたり。昨夜入り給ひし妻戸の下にたたずみ給へば、とがむべき人もなし。かしき、ここ、たたずみ聞き給へば、人の声、一、二人がほどと聞こえて、

「さても昨夜の人、誰にておはしつらむ」

「いとあやしきわざかな。昔もかかるたぐひありけれど、おのづからしるべなくやはある」
「君の思し入りたるものことわりかな」

「母上聞き給ひて、いかに我々が言ふかひなきどこそ思し召さめ。しばし、聞かせ奉らじ」
などと、わびあひつつ、

「さても今朝出で給ひし御ありさまこそ、世の常ならず見え □」

「誰ばかりかは、あのありさまはすべき。このごろ聞こえ給ふ宮の三位の中将殿にてやおはすらむ」

「さもあらば、心苦しかるべき」とかな。殿の三位の中将殿こそ、この世にはたぐひあらじと聞こえ給へど、これはなほめでたくも見え給ひしそ」

などと、おのがどちら語らひあはするも、いとをかしと聞き給ふ。
①

人々も寝ぬるにや、音もせねば、昨夜入り給ひし所より、立ち入りて見給へば、姫君はただ昨夜のままにて臥し給へり。御髪の行方も知り給はぬを、「あな心憂の御さまや。思し召すもことわりながら、今はただ昔の契りを思し知りて、常ざまに見え給へ」など、語らひ給ふ。

さばかりうつくしき人の、心をとどめて、「さりとも」^②と慰め語らひ給ふ御ありさま、やうやう日数も重なりて、宵曉となく紛れ給ふ夜な夜な、^③慰み給ふも、我ながら心憂し。母君に夢にも知らせ奉らじとつみ給へば、いかでか知り給はむ。

長月も二十日あまりになりぬれば、虫の声々も弱りつつ、枕の下のきりぎりすは、「我のみ」と鳴き出でたるに、いとど身に染む心地して、木の下払ふ風の音も、ものすさまじき庭の面に、置きわたしたる露は霜かと紛ふにも、小笛が原をながめわびけむ昔の世さへ、取り集めて悲しきに、例の中将、うち忍びおはして、尽きせず契り語らひ給ふ。有明の月、もうともにながめ給ひて、男君、

よどもにながめわびにし月影を今ぞ憂き世に有明の空 …… (ア)

と、うちながめ給へば、女君、

いとどしく浮き雲繁き夜半なればいつまで我也有明の空 …… (イ)

と、言ひ消ち給ふも、らうたくうつくしきにも、見るかひあるさまを、つくづく見給ひて、「我、明け暮れこの世に」とどまる本意なくてのみ、明かし暮らしつるを、しかるべき仏神の御導きにや」とまでおぼえ給ふにも、いとど尽きせぬ御心ざしのみまさり給へば、女君も「これや契りの」など、やうやう見知り給ふ。

(あきぎり)

注 殿の三位の中将殿 中将（宮の三位の中将）とは別の人物。

「我のみ」と鳴き出でたるに

「秋の夜のあはれは誰も知るものを我のみとなくきりぎりすかな」（『千載集』）に依拠した表現。

小笛が原 「霜むすぶ秋のすゑばの小笛原風には露のこぼれしものを」（『六百番歌合』）に依拠した表現。

昔の世 父大納言を「くして悲嘆に暮れていた頃をさす。

(一) 設問

(一) 傍線 の意味として適當なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 辞退するけれども
2 当然であるけれども
3 礼儀であるけれども
4 定めであるけれども
5 言い訳になるけれども

(二) 傍線 ①「聞き」、②「慰め」、③「慰み」の動作主として適當なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。なお、同じ番号をくり返し用いてもよい。

- 1 宮の三位の中将殿 2 殿の三位の中将殿 3 姫君 4 母上 5 人々

(三) 空欄 に入る語句として適當なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 紿はじ 2 紿ひし 3 紿へしか 4 紿ひき 5 紿ひしか

(四) 傍線～～～～～ A・B の解釈として適當なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

- A しるべなくやはある
1 女房は誰も、昨夜来た人の身元を知らないはずだ
2 女房のうちの誰かが、昨夜来た人を手引きしたに違いない
3 女房のうちの誰かが、昨夜来た人の知り合いだったはずがない
4 女房は誰も、昨夜来た人を手引きした人物を知っているはずがない
5 女房のうちの誰かが、昨夜来た人の身元を示す証拠を見つけたに違いない

B 聞かせ奉らじ

- 1 姫君に承知してもらえないだろう
- 2 姫君にご忠告申し上げないつもりだ
- 3 母上に指図されてはならないだろう
- 4 姫君にお尋ね申し上げないでおこう
- 5 母上にお知らせ申し上げないでおこう

(五) 本文中の和歌 (ア)「よとともにながめわびにし月影を今ぞ憂き世に有明の空」、(イ)「いとどしく浮き雲繁き夜半なればいつまで我も有明の空」の贈答の説明として適當なもの、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 男君（中将）が、姫君と一緒に、つらいこの世ではもはや生きられないと言つたのに対し、女君（姫君）は、無常の世の中でいつまでも生きるつもりはないと同調した。
 - 2 男君（中将）が、姫君と一緒に、今はつらいこの世を逃れて出家したいと言つたのに対し、女君（姫君）は、いつも月を眺めて亡き父を思い出すと言いつくろつた。
 - 3 男君（中将）が、姫君と一緒に、生きていけると言つたのに対し、女君（姫君）は、亡き父を弔うために出家しようと同意した。
 - 4 男君（中将）が、姫君と一緒に、つらいこの世でも生きていけると言つたのに対し、女君（姫君）は、いつまで中将と一緒に生きていられるかわからないとはぐらかした。
 - 5 男君（中将）が、姫君と一緒に、この世のつらさを忘れて生きていきたいと言つたのに対し、女君（姫君）は、浮氣な中将とは一緒に生きていけないと拒んだ。
- (六) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。
- 1 女房たちは、姫君のもとで一夜を過ごした男性が誰であるのか、翌朝になつても特定できなかつた。

- 2 女房たちは、姫君の相手には、宮の三位の中将殿よりも殿の三位の中将殿がふさわしいとうわさしていた。
- 3 中将は、誰にも怪しまれることなく、姫君のもとに忍んで行くことができた。
- 4 姫君は、中将が訪れた時にも、身だしなみを整える道具がないほど貧しい生活を送っていた。
- 5 母君は、姫君のもとに中将が通つてくることを知り、必ずしも快く思わなかつた。
- 6 中将は、九月二十日を過ぎる頃になると、ますます仏道修行に励むようになった。
- (七) 傍線――『これや契りの』など、やうやう見知り給ふについて、姫君が、中将との関係を「契り」であると考へるに至る心情の変化を説明せよ（句読点とも三十字以内）。

（以上・六十点）